



空き家の利活用について発表し、最高賞に選ばれたチーム

人口減少が急速に進む地域の課題をどう捉え、行動していくべきか。全国の中高生が3月28日までの5日間、秋田市の国際教養大学(AIU)を拠点に講義や五城目町でのフィールドワークに臨み、秋田の未来について考えた。彼ら彼女らの目に、秋田の姿はどう映ったのだろう。

**人口減時代 秋田はこれから**  
AIUのレクチャーホール... 壇上に立つ中高生たちが、英語で熱のこもったプレゼンを繰り広げていた。北海道から九州まで各地から集った生徒たちが4、5人ずつのチームを組み、人口減で縮小する地域の持続可能性を高めるためのアイデアを発表していく。次代を担う若者の育成を目的に開かれた「グローバル・リーダーシップ・キャンプ」の最終日の光景だ。

# 中高生 秋田の未来を考える

## AIUでキャンプ 全国の42人、英語でプレゼン

一般社団法人「ワン・ヤング・ワールド・ジャパン・コミッティ」(東京、OYWJ)とAIUが共催したOYWJは、世界のリーダーが課題を話し合うダボス会議の若者版とも呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の運営に当たる組織の日本法人。キャンプは2023年に沖縄科学技術大学院大(沖縄県恩納村)、24年には立命館アジア太平洋大(大分県別府市)で開かれた。

3回目の今回は全国から約100人の応募があり、中高生42人が選ばれた。県内からは秋田南高と秋田中央高の男女3人が参加した。

人口減時代の持続可能なまちづくりなどに関するAIUの教員らによる講義を受け、五城目町でのフィールドワークにも臨んだ。旧馬場目小学校を活用したシェアオフィス「馬場目ベース」や500年以上の歴史を持つ朝市を見学し、地元住民とだまご鍋を作って味わった。デジタル技術を使用した3次元木材加工機を用いて建設コストを抑えつつ、地元産の杉材にこだわった共同住宅兼宿泊施設「森山ビレッジ」も訪れた。



人口減の進む秋田の課題を解決するアイデアをプレゼンする中高生たち

地域の実情を見聞きした中高生たちはチームに分かれ、秋田の課題を解決し、可能性を引き出すための方策を話し合った。28日のプレゼンではAIUの教員やOYWJの担当者ら約80人を前に、伝統的工芸品の後継者確保や1次産業を体験するスタディーツアー、仮想空間(メタバース)を活用した秋田のPRといったアイデアを次々と披露。質疑応答も含め、流ちょうな英語でこなした。

地元住民が世代を超えて集い、地場のおいしい食事を共に味わう「コミュニティ・ダイニング」を各地で広げると提案したチームもあった。メンバーは「単なる食事会ではない。秋田の特徴である人々の結び付きを、再び強めるためのものだ」と訴えた。

空き家を利活用し、高齢者が医療やヘルスクアを受けながら安心して暮らせる施設に再生する案を発表したチームは、移住者の増加や雇用創出が見込めると説明。「高齢化は問題ではなく、チャンスに変えられる」「多額の投資をせず活用できる空き家の価値を再定義すれば、高齢者が暮らしたい秋田をつくることができる」と語った。

教員やOYWJの理事らによる審査の結果、空き家の利活用について発表したチームが最高賞に輝いた。

同じ空き家チームのメンバーで、愛知県一宮市の大成高2年池谷笑美さん(17)も五城目でのフィールドワークが印象に残った。「地元の人たちが気さくに話しかけてくれて、心が温まる、すてきな町だなと思った」と笑顔を見せた。

朝市の定期出店者以外にも門戸を開き、盛況となっている「こじょうめ朝市plus」(プラス)のことも知った。「新しい取り組みがどんどん生まれてきた。愛知県にも『消滅可能性都市』がある。五城目のように、人口が減っても活気のあるまちづくりをできるようなしてほしい」と語った。

(佐藤朋紀)